

令和 5 年 6 月 16 日現在

機関番号：30122

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19K11173

研究課題名(和文) 女性新規就農者が健康を獲得するプロセスの解明と健康増進プログラムの開発

研究課題名(英文) Process of achieving well-being among new female farmers and development of a health promotion program

研究代表者

小澤 涼子 (Ozawa, Ryoko)

天使大学・看護栄養学部・准教授

研究者番号：40636825

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は女性新規就農者が健康を獲得するプロセスを解明し健康増進プログラムを開発することを目的とした。女性新規就農者は、地域や世代を超えた人々と関係を結びながら、農業と家庭や地域の役割を両立していた。その中で、農業を通して子ども達に生きることを伝え、農業の魅力を発信する等自身ができることを見出し、自分を誇らしく思えることが女性新規就農者にとっての健康として明らかになった。結果から、女性就農者が互いを労わり、自身を誇らしく思い働き暮らすための健康づくりプログラムを検討しWeb会議システムを用い試行した。自身の歩みや思いを語り合い自分の体にも意識を向けるプログラムは有益な機会となることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

女性就農者は創意工夫した農産物の加工販売や食育活動等でも強みを活かし食と暮らしを支える重要な役割を担っている。そうした女性就農者が健やかに働き暮らすための支援は、農業の活性化と地域の健康に資するものである。本研究は女性新規就農者にとっての健康を獲得するプロセスを明らかにした。女性就農者にとって農業を営む一人の人として認められ誇らしく働きよりよく生きることそのものが健康として表れていた。試行したプログラムは、女性就農者同士が自身の歩みを振り返り労わり誇らしく思う機会として健やかに働き暮らす健康につながり、女性就農者が能力を発揮できる環境整備の推進に健康の側面から働きかける一助として意義がある。

研究成果の概要(英文)：This study aims to identify the process of new female farmers achieving well-being and to develop a health promotion program. Participant new female farmers were able to maintain balance between farming and their family and community roles while building relationships with people in their community and among generations. The analysis showed that well-being for new female farmers includes states where they can feel proud of themselves by conveying the joy of life to their children through agriculture, and sharing the attractiveness of agriculture. Based on the results, we examined a health promotion program that encourages female farmers to take care of each other and to work and live with pride in themselves, and implemented a trial program using a web-based conferencing service. The findings suggest that the program that allows female farmers to discuss their own progress and thoughts; and to become aware of their own physical conditions may serve as a useful opportunity for them.

研究分野：公衆衛生看護学

キーワード：新規就農者 女性 健康観 健康 プログラム開発

1. 研究開始当初の背景

わが国の新規就農者は年間 5 万人台で推移している。そのうち家庭や地域で多様な役割を担い活動的な時期である壮年期にあたる 45 歳未満の女性新規就農者は 5 千人を下回り 10% に満たない(農林水産省, 2017)。割合は少ないものの、女性就農者は家事や育児などで培った能力を発揮し、生産だけでなく加工や販売、子ども達への農業体験の提供など全国で活動を展開している。政策としても女性が最大限に能力を発揮できる環境整備が推進されている(農林水産省, 2015)。女性就農者は、地域の人々に身近な生活者として私たちの食と暮らしを支え生きる力を育み、地域の健康を支えるパートナーでもある。そうした女性就農者が健やかに働き暮らし続けることができるよう支援することは、農業の発展のみならず地域の健康にも資するものである。

新たに就農する女性は、結婚や自ら農業経営を決断する転機とともに、これまでと異なる自然環境や、地域の文化、人々の中で暮らしを営んでいく。そのため、女性新規就農者は、就農後の変化に適応しながら自らの健康を獲得していると考えられる。先行研究には、女性就農者は労働や育児、家事などの心理的負担、生活の質の低下にさらされている報告がある(山根, 2001)。一方、農家女性は、男性ではカバーできない生産・加工・販売・仲間づくりなど多岐に活動を行い、周囲から評価されることで自信に結び付くとの報告もある(靄, 2003)。研究代表者は、第一次産業に従事する人々の健康を、日頃関りのある保健師の捉えから明らかにし、中でも女性は、手がけた作物に自信と愛着を持ち、食育活動や直売で子ども達や人々に【生産者として食文化を発信している】様子があった(小澤ら, 2018a)。女性就農者は、あらゆる役割の両立に負担を抱えているだけでなく、自身の長を活かし自ら健やかに働きよりよい暮らしを求めていることがわかる。

これまでの先行研究は、農業従事者の健康の特徴を、身体的、精神的、社会文化的な側面からそれぞれに明らかにしてきた。しかし、健康は単なる疾病の欠如によるのではなく、人々と環境との相互作用によるものであり(Blaxter.M., 2010) 暮らす人々にとっての健康を各々の側面が影響し合いあられるものとして理解する必要がある。女性新規就農者が、新たな環境や人々、地域の文化との相互作用の中でどのように自らの健康を獲得しているのか、そのプロセスを解明することは、暮らしの変化や転機を捉えた支援を可能とし、さらには農業政策にある、女性就農者が最大限能力を発揮できる環境整備に、健康の側面から提言が可能となると考えた。

2. 研究の目的

本研究では、女性新規就農者が新たな生活を営む中で健康を獲得するプロセスを明らかにする。その結果を基に、女性就農者が健やかに働き暮らすための健康づくりプログラムを検討、試行し開発することを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 女性新規就農者が新たな生活を通して健康を獲得するプロセスの解明

研究対象者は、家庭や社会で多様な役割を果たす 25 歳から 45 歳の壮年期に新規就農した女性を対象とした。就農当時の理由や就農時の年齢、就農年数、居住地域は問わないこととした。研究対象者は、農業を基幹産業とする市町村に勤務する保健師、産業振興部署などの農業関係者等を介して紹介を受けた。さらに農業関係書籍等から女性農業グループの情報を収集し、研究対象者へ電話、文書により研究の趣旨と協力内容を説明し依頼した。協力の内諾が得られた場合に、研究者より改めて口頭と文書で説明した。データ収集方法は半構造的インタビューにより行い許可を得て録音した。分析方法は、インタビュー内容から逐語録を作成し、データの意味内容を重視して分析単位としラベル名を付け、類似性と相違性を検討しながらカテゴリを生成した。カテゴリの関係性を比較検討し抽象度を高め構造化し、女性新規就農者が健康を獲得するプロセスを明らかにした。本研究では当事者にとっての健康すなわち健康観の定義を、研究代表者の先行研究(小澤ら, 2018a; 小澤ら, 2018b)をもとに「自然環境や労働、人々との相互作用を繰り返す、調和を図りながら自らよりよく生きることを求めて見出されるその人にとって安寧な状態にあること」としてデータ収集と分析を進めた。

(2) 女性就農者が健やかに働き暮らすための健康づくりプログラムの検討と試行

研究(1)の結果を基に、女性就農者が健やかに働き暮らすための健康づくりプログラムを検討し試行した。女性新規就農者にとっては、農業を営む暮らしの中で自らできることを見出し、誇らしく働きよりよく生きることが健康として明らかになった。そうした健康の獲得には、仲間と共に自分を労わり、これまで歩んできた自身を誇らしく思い自分の可能性を見つける機会が必要となる示唆を得て、プログラムを作成した。プログラムは 2 回、いずれもグループ座談会とリラクゼーションを目的としたストレッチで構成した。第 1 回は「これまでの私をいたわる - 自分を語って仲間とつながり労わる -」をテーマとした。座談会では 1 年間を振り返り自分が頑張ったこと、よくやったと思うことを言葉にすることから始め、就農からこれまでの暮らしや働き方への思いを自由に語り、参加者同士が振り返り語りあうことができる機会として展開した。ス

トレッチは、自分の体に意識を向けることを目的にマインドフルネスの考え方を基にした呼吸法と座ってできるストレッチを実施した。第2回は「これからの私を語る - 私らしく働き暮らしていくために仲間とつながる - 」をテーマとした。座談会では前回の内容を受け、自分がこれからも大切にしたいこと、取り組みたいこと、家族や同業の仲間、生産者や消費者、地域の人に向けて伝えたいことを言葉にしなが、自分自身や農業との暮らしの魅力を仲間と共に再発見することを目的に展開した。ストレッチは1回目と同様に実施した。

開催方法は新型コロナウイルス感染症の影響を受けず、遠方からの参加も可能な Web 会議システム (Zoom) を活用した。研究対象者は 25 歳から 55 歳までの女性就農者とし、研究 (1) のインタビュー参加者や農業女性グループの他、女性就農者へ周知し研究参加者を募った。参加の内諾が得られた場合は、研究者より改めて口頭と文書で説明した。プログラムの評価は、プログラム参加前、2 回目終了後、終了 1 か月後に無記名自記式質問紙調査を実施し実用可能性を検討した。

4. 研究成果

(1) 女性新規就農者が新たな生活を通して健康を獲得するプロセスの解明

研究参加者は 23 名、平均年齢は 35.4 歳、平均就農年数は 8 年であった。生産内容は、多品目を育てる畑作、稲作、果樹の他、酪農業、養鶏業、めん羊業等多岐にわたった。

女性新規就農者は、新たな地へ転入し、人々との暮らしや農業の考え方、生活を共にする家族の考えといった【この土地の農の流儀を体得する】ことに奮闘しながら生活に適応し、自らの調和を保っていた。地域の祭事の手伝いや会合に参加することで自ら関係を切り拓き、互いの境遇を気に掛け合いお互い様の関係を結んでいった。農繁期には自分の休息を後回しにして、生き物が育つサイクルに合わせて働くことを優先し、家事や育児を入れ込むように日々の生活を回していた。その中で、生き物も自分も自然に生かされていることに敬意を持ち【“自然様”に懐かれて農を切り盛りする】中で、自身の働き方と暮らし方の調和を保っていた。女性新規就農者は、農作業に身体が馴染んでいくだけでなく、身も心も農家として生きていく在り方が様になっていった。その中で、これまで夫の陰に隠れる農家女性の見られ方から、性別に関係なく一人の人として在りたいと求めていた。自然に生かされていると自分が感じてきたからこそ農場を舞台に子どもたちに生きることを伝え、生産だけでなく暮らしも含めた農の魅力を発信し、この土地に恩返しをしたいと思うようになっていった。自分ができることを見出し就農した【この土地の農人として誇らしく生きる】ことが、自然環境や労働、人々との相互作用の中で、調和を図りながらよりよく生きる女性新規就農者にとっての健康であった。女性新規就農者が健康を獲得するプロセスは、【この土地の農の流儀を体得する】【“自然様”に懐かれて農を切り盛りする】【この土地の農人として誇らしく生きる】の 3 つの概念が、就農当初から段階的でありながらかつ同時並行で獲得する重層的な構造を成していた。女性就農者にとって、農業を営む一人の人として認められ誇らしく働きよりよく生きることそのものが健康であった。身近な人々や、世代や地域を超えた人々とつながる居場所のような関係の中で、自身の可能性やこれまでの歩みを誇らしく思い、自分を労わる機会が、健やかに働き暮らす健康につながることを示唆された。

(2) 女性就農者が健やかに働き暮らすための健康づくりプログラムの検討と試行

研究参加者は 4 名 (30 歳代 2 名、40 歳代 2 名)、就農年数は全員が 5 年以上 10 年未満であった。農業の種別は酪農業が 3 名、稲作農業が 1 名であった。プログラム終了後の感想には、「各地の同じ立場 (農家の嫁) の人と話す機会がない」「自分のことを言葉にして語ることがなかなかない」など、同じ境遇の仲間と自分を語り振り返る機会が少ない実態の記述があった。プログラムで「自分の気持ちを口にしてスッキリした」「話を聞いてもらいリアクションしてもらうことでリフレッシュした」「農家のスタイルは違っても共感することが多く良い時間だった」と自分のことを安心して語ることができる時間が良い機会となっていた。そして「自分頑張っているかもと心が晴れた」「仕事頑張ろう楽しもうという気持ちになれた」と自分を認め働くことを楽しむ気持ちをもたらしていた。プログラム 1 ヶ月後の仕事や生活への思いと考えについて、「他人のことばかり考えるのではなく自分も大切に過ごす」「体が資本なので自分なりにケアする」「農業は定年がないので無理なく楽しく働き続けられるように自分をマネジメントする」など、農業を続けるために自分を労わり働き続ける考えが記述されていた。「仕事の時は家のことを考えず、家のことをしている時は仕事のことを考えず一つに集中する」といった自分を保つ対処も記されていた。農業をしている姿を「子どもたちに見られていることを意識して働き大人になることが楽しみになるように見せたい」と自分の働き方を子どもたちにも誇らしく見せていきたい思いもあった。

自分を振り返り語り労わることを目的に試行した今回のプログラムは、日頃自分のことを後回しに多様な役割を両立している女性就農者にとって、同じ境遇の仲間と交流しながら自分を確認し認め誇らしく思う機会につながることを示唆された。自分のためだけの時間を持ち自身に意識を向けることは、健やかによりよく働き続けるためにも有益な機会となる可能性がある。今回のプログラムは web 会議システムを活用した。子どもの近くで参加した者もあり、場所を問わず環境と時間が整えば、各々のスタイルで生活の中にプログラムを取り入れることが可能となることを示唆された。今後は、農業の働き方やサイクルの特徴を踏まえ継続的なプログラムの検討が課題である。

引用文献

- Blaxter M (2010) / 渡辺義嗣, 訳 (2011): 健康とは何か 新しい健康観を求めて第2版, 41-65, 共立出版, 東京.
- 農林水産省 (2018). 平成 29 年新規就農調査結果, <https://www.maff.go.jp/j/tokei/kouhyou/sinki/index.html> [2019年9月14日]
- 小澤涼子, 吉田礼維子, 大森純子 (2018a). 保健師が捉える第一次産業従事者にとっての健康, 日本公衆衛生看護学会誌, 7 (3), 143-150.
- 小澤涼子, 大森純子 (2018b). 「農業従事者の Health Belief」の概念分析, 第6回日本公衆衛生看護学会学術集会.
- 靄理恵子 (2003). 農家女性のエンパワメントを促進する背景とその要因, 村落社会研究, 9 (2), 49-60.
- 山根洋右 (2001). 農山村における中高年女性の健康実態把握と健康増進対策に関する研究, 日本農村医学会雑誌, 49 (6), 831-839.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Ryoko Ozawa, Junko Omori
2. 発表標題 Qualitative Research on the Well-being of New Female Farmers
3. 学会等名 East Asian Forum of Nursing Scholars (EAFONS) 2021 (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小澤涼子、大森純子
2. 発表標題 壮年期の女性新規就農者が転入地で獲得する健康観の構造
3. 学会等名 第9回日本公衆衛生看護学会学術集会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------